

冷や汗が流れた理由

4月22日～26日、台湾五岳の内的一座「北大武山」に登って来た。帰国した翌27日、BSジャパンの7PM「心の洗濯！マイペースで山を歩こう」に出演した。市毛良枝さんが一緒だったので、楽しい時間ではあった。

我が家に戻ると、机の上に本が載っていた。タイトルは『道ひとすじ 不破哲三とともに生きる』、著者は上田七加子さん。不破哲三さんの奥さまである。表紙がいい。二十代の不破さんと七加子さんが並んで、仲むつまじく微笑んでいらっしやる。帯のほうには現在のお二人の写真があって、二枚の写真が「夫と私の革命的熱愛人生」を語っている。「岩崎元郎様 上田七加子」とサイン入りの本だ。

テレビの生番組出演は、緊張していないように見えるかもしれないが、緊張する。番組が終了してそそくさと我が家に戻ると、北大武山から引きずったままの緊張感から解放されて、五日間の山旅の疲れがどっと出て来たところに、『道ひとすじ』が待っていてくれたという次第。感激、疲れが吹っ飛んだ。表紙をめくって、そこに七加子さんのサインを見つけた瞬間に、ドット冷や汗が背中を流れた。冷や汗が流れた訳を、以下に報告したい。

大々々先輩をつかまえて「七加子さん」呼ばわりは、身の程知らずの大失礼であることは重々承知の上で、七加子さんと呼ばせて頂く。1999年12月、ぼくは青根山荘にお邪魔した。赤旗日曜版2000年元日号に、不破さんとの対談を載せるという、その取材のためだ。

一面を飾る写真は、山荘近くの富士山が見える所まで行って、不破さんと並んで富士山をバックに写真を撮った。山荘に戻って山の魅力についての対談。対談終了後、七加子さんも加わって楽しい談笑のひとつきを過ごした。お忙しいお二人である。対談が終了したら、すみやかに退席するのが常識であろうに、非常識な岩崎は、不破さんと七加子さんのお二人にすっかり懐いてしまったようなのだ。お二人の前で、得意の大風呂敷を広げてしまった。「夢は、登山小説を書くことなんです」、と。

山岳小説と登山小説は違うんです。山岳小説の代表は、『氷壁』です。ぼくの書く登山小説は、読み終わったとき、地図の読み方ってこうなんだ、とか、こんな風に足を運べばバテないのか、なあんて山の勉強になるような小説が書きたいんです。赤川次郎みたいな軽快な文体で、ラブコメ、ファンタスティック、ちょっぴりミステリーな登山小説を書きたいなんて、思っているんです。

お二人の前に大風呂敷を広げられるだけ広げて、ぼくはようやく重いお尻を上げた。車に乗り込むぼくに、七加子さんが声をかけて下さった。「登山小説がんばってね、期待しますよ」。それから12年、まだ一行も書いていない。これが、ドット冷や汗が流れた理由である。